

【里山 夢 プロジェクト】

「野菜が待っている!!」
Stay Home Town!!」

「みんなで、みんなのふるさとを！」をキャッチフレーズに、「野菜作りを通じて、健康づくり・生きがいづくり」を目指す里山夢プロジェクト。子ども達の時、農繁期に授業を休んだ経験から野菜作りに精



通している方もいれば、「いろいろな経験をしたい」と畑にやってくる初心者もいる。畑作業は時間を共有する中で人となり互いにわかってくるから居心地がいいそうだ。畑には野菜を育て収穫する楽しみ、十時半の休憩時間の楽しみ、収穫しながらおしゃべりする楽しみ、がある。「やつぱり人は人とかかわらないとつまらない」と話す。参加している人には様々な特技がある。畑の周りに花を育てたり、収穫物で漬物を作ったり持ってきたり、休憩時に使うベンチや机を作ってきたり、コロナにより一時作業メンバーを減らしたり、恒例の「じゃがいも掘り体験会」では告知をせず開催するなど配慮してきた。しかし野菜づくりの作業をやめることはできず、屋外で畑も広く密を避けられるので早く再開した。毎週火曜日九時三十分 畑作業はみんなの居場所として、まだまだ続く。

【緑園サロン】

原点の想いから、
今できるカタチを考える

有志が集まり立ち上げて18年の高齢者サロン。普段は全員でうたや軽体操などをしてから、トランプ・麻雀・折り紙(手芸)・歌唱などグループに分かれて趣味活動と2部構成で開催している。コロナ禍で中止を余儀なくされ「人と会って話しをすることの大切さを改めて感じた」という。だからサロン中止を伝える手段は電話だけでなく、自宅でもできる体操の資料などを一軒一軒回って配ることもした。運営するボランティアさんは「麻雀指導に教え甲斐を感じている」「友人ができたきっかけの場所を大切にしたい」と様々な気持ちがあるが、今一度サロンの原点である『挨拶が交し合えるまちにしたい』という想いを皆で再確認し、今なにができるのかを話し合われている。地域に根付いた緑園サロンは灯を決して絶やさない。



【若「ツツ」体操会】

「やつぱり動かなきゃ
じっとしてちゃダメ」

新橋地域ケアプラザを拠点に9年続く若「ツツ」体操会。体操して若さと健康を保つ「ツツ」を学んでいる。そのため参加者に何故参加するのかと聞くと「健康維持のため」としつかり返ってくる。しかし「コロナウイルスによりケアプラザが使用できなくなった時、どうしていいかを伺うと「身体を動かすことが大事」とTVでやっている体操をしたり、ウォーキングや、これまで若「ツツ」体操会で学んだ運動をしたりと、個々に体を動かしていたそうだ。しかしこれまでの活動で醸成された仲間意識や自宅でもできる簡単な運動でも「自分一人では続けにくい」といった気持ちから、できるだけ早く再開したかったそうだ。今は時間を感染防止から90分から40分に短くした。それでも3か月ほどのブランクがあったので、「キツさを感じているけれど、これからも頑張っていく」と話した。



新しい 生活様式

それぞれの流儀

コロナ禍でこれまで続けてきた地域の活動が安全に参加できるのか? 判断に迷うところ。そこでケアプラザでは中川・緑園・新橋エリアで活動をしている5つの団体に今の想い、活動の現状などを伺ってきました。そこには活動を始めた時の原点に立返った覚悟や人とのつながりを絶やさないう想いがつまっていました。

【東花会】

顔のみえづらいマンションで、
人と人がつながる工夫

緑園サンステージ東の街住民が対象のシニアクラブ東花会。「このまち特有のものがあるから、それを活かすやり方を常に模索している」という。集合住宅ならではのポスティングのしやすさという強みを活かし、紙を使った「便り」で情報発信を続けている。毎月の便りには、定例会出席の返信欄にコメント枠が設けてあり、これまで記入は殆どなかったが気持ちを吐き出す場が減ったためか記入する人が増えた。昨年、台風で停電になった際に、「小さな OSEKAI」のつもりで、便りとは別に見舞いのレターを会員にポスティングしたら、「闇夜に灯火を得た気持ちだ」など評判が良かった。「便りを届けることで見守ってくれている人がいると思える。つながっていると安心する。それが孤立を防ぐ。」手間ひまかかることではあるけれど、「便りにつながっているから活動再開に焦りはない。」「集まれるようになったら、また集まればいいんだよ。」



【コミュニティしんばし食堂】

「私たちにできること」をやる」を
前提にメンバーで話し合いながら
方向性を決めていく

「大人も子どもも孤食を防ぎたい」「成長期の子どもにしっかりと食べてもらいたい」という気持ちから始まったコミュニティしんばし食堂。一方で「事業を始めることは大変なこと。中途半端な気持ちではやるな。やるのだしたらちゃんと責任をもって継続してやらない」と周囲に言われていた。「始めた以上は投げ出すことはできない」と不転の覚悟をもってスタート。それがコロナで一変。マスクやアルコールが手に入らない。多くの方に利用されていた実績を考えれば、「来てくれる人やスタッフの安全性が担保できない」と、きっぱり食堂をやるのは断念。「それでも私たちにできることはある」と話し合い、食堂は休止しつつ今は月に1〜2回食材やお菓子を配布している。

